

アンスロピック・ショックの影響 AI進化がもたらすソフトウェア業界再評価

2026年02月17日

◀ お伝えしたいポイント

- アンスロピックが発表した「Cowork」のプラグイン機能がマーケットを驚かせたのは、その開発スピードと幅広い対象分野です。AIがソフトウェア企業を置き換えるリスクが意識され、ソフトウェア企業を中心に株価は下落しました。
- AIの進化及び普及は、AIインフラ関連企業の業績拡大を後押しする要因になると期待されます。一方、ソフトウェア業界は、銘柄選別が進むと考えます。

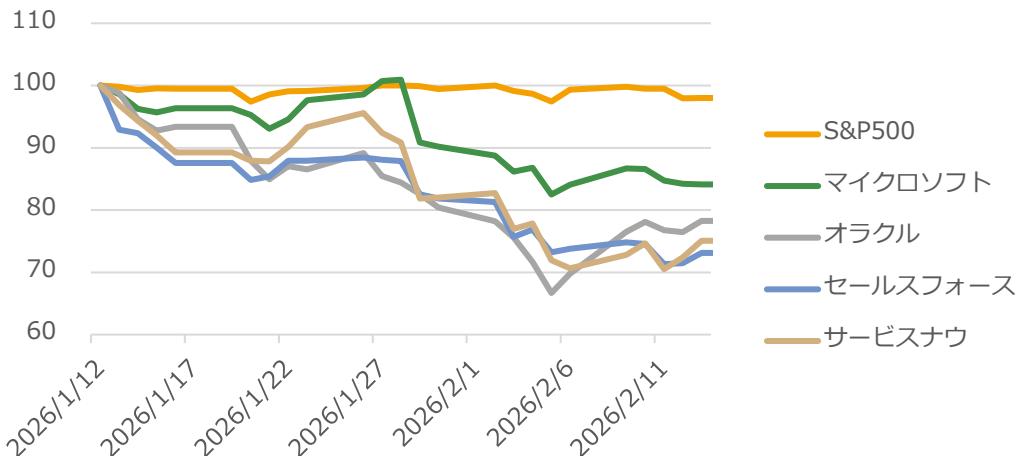
アンスロピック、新しいAIツールをリリース

アンスロピックは2026年初にかけて、実務用途を意識したAIツールを相次いで発表し、市場に大きなインパクトを与えました。まず、1月12日にリリースされた「Cowork」は、従来のチャット型AIを超えて、人間とAIが同一の業務環境で協働することを前提に設計されたツールです。Coworkは、単なる質問応答にとどまらず、タスクの分解、進捗管理、ドキュメント作成、意思決定補助までを一貫して担う「業務パートナー型AI」と位置付けられます。

続いて、アンスロピックは1月30日、Cowork向けのプラグイン機能を発表しました。これは法務や財務などの11種類の分野の専門的なタスクを自動化し、AIが自律的に専門性の高いワークフローを実行するための機能です。

大手ソフトウェア企業の株価が続落

(2026年01月12日～2026年02月13日)



※2026年1月12日 = 100として指数化

(出所) ブルームバーグより大和アセット作成

「SaaS不要論」の再燃とソフトウェア株の急落

こうした動きを受け、市場では「SaaS(Software as a service)不要論」が再び注目され、ソフトウェア企業の株は大きく売られました。マイクロソフト、セールスフォース、サービスナウをはじめとする主要ソフトウェア銘柄はいずれも年初来で調整局面に入りました。

従来、ソフトウェア企業の最大の強みは、長期にわたり安定的なサブスクリプション収益を確保できる点にありました。しかし、生成AIの進化により、競争環境の激化や機能のコモディティ化が想定され、収益性が構造的に圧迫されるリスクが意識され始めています。さらに、AIの普及によりソフトウェア開発の内製化が加速し、企業が従来SaaSに依存していた機能を自社AIで代替できるのではないか、という懸念も生まれました。その結果、「AIがSaaSを置き換える」という極端なシナリオを背景に株価が調整しました。

ディープシーク・ショックとアンスロピック・ショックの違い

「ディープシーク・ショック」は、AI開発のコスト効率と計算能力の要件が焦点でしたが、「アンスロピック・ショック」は、従来のソフトウェアのビジネスモデルを破壊する可能性が焦点になりました。ディープシークによる2025年1月の「R1」モデルのリリースは、競争力のある最先端AIが比較的安価で構築できることを示し、AI開発における資本集約度に関する前提を根本的に覆しました。その結果、半導体銘柄を中心に株価が下落しました。

一方で、アンスロピックのCowork向けのプラグイン機能は、AIエージェントが法務、営業、財務機能にわたる複数ステップのワークフローを独立して実行できることを証明しました。そのため、既存のSaaS企業のサービスがAIに代替されるリスクが意識され、ソフトウェア業界を中心に株価が下落しました。

今後のテクノロジー業界への影響

現時点では、アンスロピックの開発が将来的にどの程度の影響を及ぼすかを断定するのは時期尚早です。ただし、足元で観測できる重要な事実はAI技術の進化スピードが極めて速い点です。そして、法律や会計といった専門性の高い分野を含む幅広い領域に応用可能であり、AIの社会実装と普及を一段と押し上げる可能性が高い点です。

今後AIが破壊的な存在になるかどうかは、主に二つの要因によって決まると考えます。一つ目は、AIサービスの品質および信頼性です。どれほど高度な技術であっても、業務の中核を担うには十分な精度と再現性が求められます。二つ目は、企業側の導入意欲と導入スピードです。自動運転技術が既に存在しているにもかかわらず、実際の利用が世界の一部地域にとどまっていることは、技術の存在と社会実装の間に大きなギャップがあることを示す好例です。

AIの活用の拡大に伴い、計算需要が増加することから、半導体やクラウド事業者などのAIインフラ関連銘柄は中長期的には恩恵を受ける可能性が高いと考えます。AIモデルの高度化やAIエージェントの常時稼働には、引き続き大規模な計算資源が必要であり、堅調なインフラ需要が続くと想定されます。

一方で、ソフトウェア業界については、銘柄選別が進むと考えます。AIの導入によって製品開発のスピードは向上し、開発コストも大幅に低下する可能性があるため、業界全体としてはポジティブな側面が大きいです。ただし、すべての企業がその恩恵を享受できるわけではありません。付加価値の低い、機能単体で提供されているソフトウェア製品については、AIによって代替されるリスクが高まるでしょう。その一方で、独占的なデータを保有している企業や、高度なデータセキュリティ、業務プロセス全体をカバーするプラットフォームを提供する企業にとっては、AIは新たな成長エンジンとなりそうです。特に、AIエージェントを製品やサービスの中核に組み込むことができる企業は、競争優位性を一段と強化する可能性が高いです。結果として、AI統合に成功したプラットフォームへ市場シェアが集約していく展開が見込まれます。今後はソフトウェア企業の業績動向や受注状況を慎重に見極める局面に入ったと考えます。また、各社が発表するAIエージェントについても、その実用性や企業顧客による採用の進捗が銘柄選別をするうえでの重要な材料となりそうです。

当資料のお取扱いにおけるご注意

- 当資料は投資判断の参考となる情報提供を目的として大和アセットマネジメント株式会社が作成したものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡しする「投資信託説明書(交付目論見書)」の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。
- 当資料は信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載内容は過去の実績であり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。記載内容は資料作成時点のものであり、予告なく変更されることがあります。また、記載する指数・統計資料等の知的所有権、その他一切の権利はその発行者および許諾者に帰属します。
- 当資料の中で個別企業名が記載されている場合、それらはあくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドに今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。